

仙台市文化財調査報告書第356集

# 仙 台 城 跡

——北方武家屋敷第2次発掘調査報告書——

2010年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会



# 序 文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大なご理解とご協力を賜り、心から感謝申し上げます。私たちの住む仙台市には現在約 800 カ所もの遺跡が確認されていますが、各種開発事業により、遺跡の消滅の危機に日々さらされています。本報告書に収めました仙台城跡の北方武家屋敷もこの例外ではございません。

事業地内はかねてより遺跡の存在が知られており、開発事業にあたり、事業地内の遺跡の取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねて参りましたが、やむを得ず記録保存の処置を講ずることとなりました。

発掘調査地点は、仙台城二の丸跡の北側に位置し、近世の絵図資料によれば伊達家家臣の屋敷地とされています。調査の結果、屋敷地の一端を示す井戸跡や柱列跡などが見つかりました。

先人の残した貴重な文化財を保護し、保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私たちの大きな責務であると考えております。しかしながら文化財の保護には、地域の皆様の深いご理解とご協力が必要となります。本報告書が一人でも多くの皆様に活用されることで、地域の歴史が明らかになり、郷土への想いや文化財の理解がさらに深まりますことを願ってやみません。仙台市教育委員会では、今後とも文化財の保護と活用に取り組んでいく所存であります。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言いただきました多くの方々に心より感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 荒井 崇

## 例　　言

1. 本書は仙台市下水道局による亀岡雨水幹線移設工事に伴い実施された、仙台城跡（北方武家屋敷第2次）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国際文化財株式会社が仙台市教育委員会より受託し、仙台市教育委員会の指導の下に行った。
3. 本書の作成・編集・執筆は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 渡部紀・加藤隆則・志賀雄一の指導の下に、国際文化財株式会社 馬場由行・福原千恵・伊勢契が担当した。
4. 本調査の実施及び報告書の作成に際し、次の諸氏・機関よりご指導、ご教示、さまざまご協力を賜った。  
松本秀明（東北学院大学） 仙台市交通局 東北大
5. 発掘調査に関する一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。
6. 報告書掲載陶磁器の産地・年代などの確認は、佐藤洋（仙台市教育委員会文化財課主査）が行った。

## 凡　　例

1. 本書の土色は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局 1998年版）に準拠している。
2. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000地形図「仙台」と1/10,000地形図「青葉山」「仙台駅」を合成した。
3. 図中の座標値は日本測地系座標を使用した。
4. 本文図版等で使用した方位は真北を基準としている。
5. 標高値は、海拔高度（TP）を示している。
6. 遺構図は原則として1/60縮尺で掲載した。
7. 基本層の表記は、表土層からローマ数字を用い、遺構堆積土についてはアラビア数字で表記した。
8. 遺構図において、■は蹠（礎石・根固め石・礎板石）、■は柱痕を表す。その他の表現方法については各図中に凡例を示した。
9. 遺構・遺物の登録・整理及び報告書での表記には、以下の分類と略号を使用した。  
SA：柱列跡、SD：溝跡、SE：井戸跡、SK：土坑、P：ピット、SX：性格不明遺構  
A：繩文土器、C：非クロコ土師器、D：ロクロ土師器、F：丸瓦・軒丸瓦、G：平瓦・軒平瓦、H：その他の瓦  
I：陶器・瓦質土器・土師質土器、J：磁器、K：石製品、N：金属製品、X：その他の遺物
10. 遺構計測表中の数値で( )付の数字は残存値である。
11. 遺物実測図は縮尺1/3としている。
12. 陶磁器などの実測図のうち、中心線を一点鎖線としたものは、反転して図上復元したものである。
13. 陶磁器の釉薬部の範囲は、一点鎖線で示した。
14. 遺物実測図において、■はススを表す。
15. 遺物観察表の成形技法は、遺物の大部分がロクロ成形であるため、それ以外の技法を記載した。法量の記載で( )付きの数字は残存値である。
16. 写真のみを掲載した遺物の観察表は、出土した遺構の遺物観察表中に載せている。
17. 遺物写真は任意のスケールであるが、銭貨は原寸で表示した。

# 本文目次

## 第1章 調査の概要

第1節 調査要項	1
第2節 調査に至る経緯と経過	1

## 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3

## 第3章 調査の方法と経過

1 調査方法	4
2 グリッド設定	4
3 調査経過	4

## 第4章 調査の成果

第1節 基本層序	5
第2節 検出遺構と出土遺物	7
1 III層上面	7
2 IV層上面	8
3 V層上面	9
4 遺構外出土遺物	18

## 第5章 総括

第1節 検出遺構と出土遺物について	19
1 検出遺構について	19
2 出土遺物について	20
第2節 まとめ	22
参考文献	22

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図	1	第14図 SD1溝跡出土遺物	11
第2図 周辺の遺跡分布図	2	第15図 SE1井戸跡平面図・断面図	11
第3図 仙台城下絵図における調査区周辺図	3	第16図 SE1井戸跡出土遺物	11
第4図 地区区分とグリッド配置図	4	第17図 SK1~7・10土坑平面図・断面図	13
第5図 基本土層柱状図と断面位置図	5	第18図 SK6土坑出土遺物	13
第6図 調査区壁断面図	6	第19図 SX1性格不明遺構平面図・断面図	14
第7図 III層分布図・遺構配置図	7	第20図 SX2性格不明遺構平面図・断面図	15
第8図 III層検出遺構平面図・断面図	7	第21図 SX2性格不明遺構出土遺物	15
第9図 IV層分布図・遺構配置図	8	第22図 V層上面検出ピット平面図・断面図	16
第10図 IV層検出遺構平面図・断面図	8	第23図 遺構外出土遺物	18
第11図 V層分布図・遺構配置図	9	第24図 III~V層上面検出遺構配置図	19
第12図 SA1柱列跡平面図・断面図	10	第25図 堆積土別遺構配置図	19
第13図 SD1溝跡平面図・断面図	11		

## 表 目 次

第1表 遺跡地名表	2	第14表 SK6土坑出土遺物観察表	13
第2表 主な絵図と挙筆者・記載名	3	第15表 SX1性格不明遺構土層注記表	15
第3表 調査区基本土層注記表	5	第16表 SX2性格不明遺構土層注記表	15
第4表 III層検出遺構土層注記表	7	第17表 SX2性格不明遺構出土遺物観察表	15
第5表 III層ピット計測表	7	第18表 V層ピット土層注記表	17
第6表 IV層検出遺構土層注記表	8	第19表 V層ピット計測表	17
第7表 IV層ピット計測表	8	第20表 P26遺物観察表	17
第8表 SA1柱列跡土層注記表	10	第21表 遺構外出土遺物観察表	18
第9表 SD1溝跡土層注記表	11	第22表 III~V層上面検出遺構一覧表	19
第10表 SD1溝跡出土遺物観察表	11	第23表 堆積土による遺構分類表	19
第11表 SE1井戸跡土層注記表	11	第24表 遺物一覧表	20
第12表 SE1井戸跡出土遺物観察表	11	第25表 出土遺物の产地	20
第13表 SK1~7・10土坑土層注記表	13	第26表 出土遺物の時期	21

## 写真図版目次

図版1 調査区全景・壁断面	23	図版4 SX1性格不明遺構	26
図版2 柱列跡・井戸跡・溝跡・土坑	24	図版5 出土遺物	27
図版3 土坑	25		

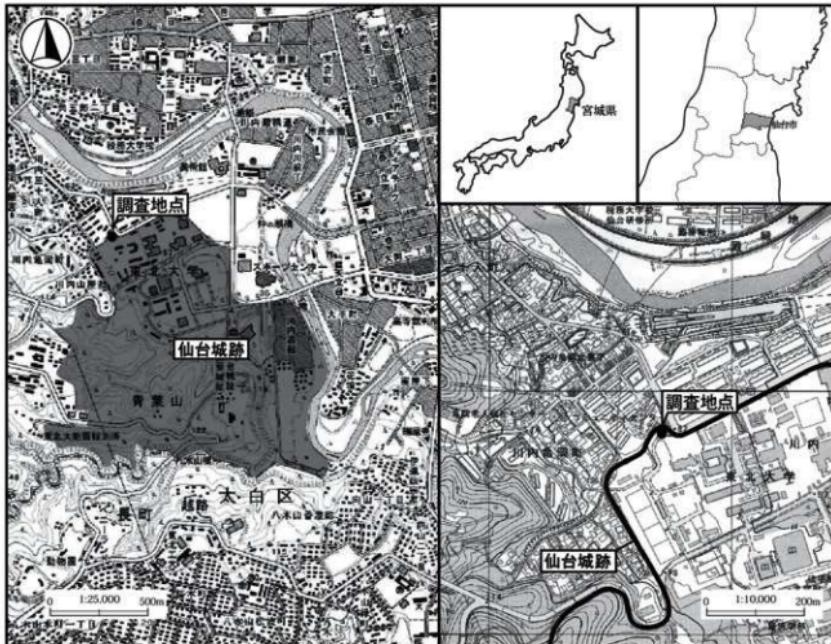
# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査要項

遺跡名	仙台城跡（宮城県遺跡番号 01033）	調査機関	国際文化財株式会社 東北支店
所在地	仙台市青葉区川内亀岡町 68 地内	調査体制	調査員 馬場 由行 調査補助員 福原 千恵
調査主体	仙台市教育委員会	計測員	伊勢 契
調査担当	文化財課調査係主任 渡部 紀	調査対象面積	155 m <sup>2</sup> (調査面積 78 m <sup>2</sup> )
	文化財課調査係主事 加藤 隆則	調査期間	平成 21 年 6 月 10 日～7 月 28 日
	文化財課調査係文化財教諭 志賀 雄一		

## 第2節 調査に至る経緯と経過

今回の発掘調査は、仙台市青葉区川内亀岡町 68 地内に計画された亀岡雨水幹線移設工事に伴う調査である。平成 21 年 3 月 31 日付けで、仙台市下水道管理者である仙台市長 梅原 克彦より、当該工事に伴う発掘通知が提出された。工事地内は仙台城跡の遺跡範囲内であることから、同年 4 月、主幹課である建設局管路建設課との協議が持たれた。この結果、遺跡の破壊を免れない 155 m<sup>2</sup> を調査範囲とし、同年 6 月より本調査を実施した。

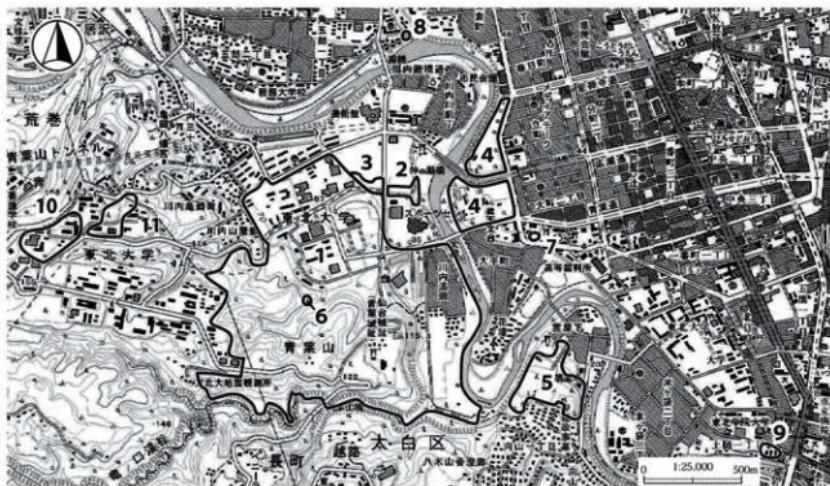


第1図 調査区位置図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

仙台城跡（北方武家屋敷第2次）は仙台市青葉区川内に所在する。仙台城二の丸跡（東北大学川内キャンパス）の北東にあたり、仙台市西部に張り出す広瀬川流域の河岸段丘上に位置する。仙台市の河岸段丘は、上位より青葉山段丘・仙台台ノ原段丘・仙台上町段丘・仙台中町段丘・仙台下町段丘の順で5面に区分される（註1）。段丘面の形成時期は、関東平野の成立時期と対比して考察されており、仙台台ノ原段丘：下末吉期（13～12万年前）、仙台上町段丘：武藏野期（10～5万年前）、仙台中町段丘：立川期（3万年前）、仙台下町段丘：有楽町期（数千年前程度）に比定されている（註2）。本遺跡が所在する川内地区は、仙台上町段丘面に位置し、東側に向かい傾斜している。調査地点の標高は、南西側が64.6mであり、北西側が64.0m、南東側が64.3mである。「安政補正改革仙府絵図」（1856～1859年）の絵図や昭和21年の地図（註3）などで調査地点の北側に広瀬川に至る沢の存在が確認できる。



第2図 周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名称	時代	所在地	告称	番号	遺跡名称	時代	所在地	告称
1	仙台城跡	小世・近世	青葉区川内・荒巣	城館跡	7	片平仙台大神宮の板碑	小世	青葉区片平1丁目	板碑
2	川内A遺跡	縄文・近世	青葉区青葉山2丁目	武家屋敷・敷布地	8	御不動尊文永1年板碑	小世	青葉区庄町	板碑
3	川内B遺跡	縄文・近世	青葉区青葉山	武家屋敷・敷布地	9	土種遺跡	縄文	青葉区土種1丁目	散布地
4	桜ヶ岡公園遺跡	縄文・近世	青葉区桜ヶ岡公園	武家屋敷・敷布地	10	青葉山E遺跡	縄文早・中・後、奈良・古代	青葉区荒巣字青葉	包含地
5	経ヶ峠伊達家廬所	近世	青葉区愛宕下	廬所	11	青葉山B遺跡	縄文早・中・後、奈良・古代	青葉区荒巣字青葉	包含地
6	川内古碑群	小世	青葉区川内・荒巣	板碑					

第1表 遺跡地名表

註1 仙台市環境計画課編・松本秀明監修 2001 『せんだい空写真集 柱の都いま むかし』 仙台市環境計画課

註2 中川久夫 1960 「仙台付近の第四系および地形(1)」『第四紀研究』1

註3 (財)日本地図センター 1998 『地図で見る仙台の変遷』

## 第2節 歴史的環境

調査地点の周辺には縄文時代の包含地である青葉山B遺跡、青葉山E遺跡（第2図-11・10）、南東には中世の板碑群（第2図-6）が所在している。調査地点の位置する川内地区は、現在は東北大大学川内キャンパスが位置している。かつては川内南キャンパスの位置に仙台城二の丸が、また川内北キャンパスの位置には武家屋敷が存在していた。本調査区はその武家屋敷地の一角落である。

該当する屋敷地は、現存する最も古い仙台城下の絵図である「奥州仙台城絵図」（正保2・3年〔1645年～1646年〕）では侍屋敷と表記されており、それ以後の絵図では屋敷を構える人名が記されている（第2表）。絵図によれば亀岡御殿と記された区画は、それ以前の絵図では複数の拝領者が確認でき、変遷を追うことができる（註1）。亀岡御殿は、仙台藩12代藩主伊達齊邦正室記徳子（栄心院）や11代藩主齊義側室恒子（延寿院）が移り住み（『榮山公治家記録』）、13代藩主慶邦が、明治元年に藩主を退き、一時移り住んだ屋敷である。家格（註2）をみると、調査区周辺は17世紀末から幕末まで、上級藩士また伊達家に縁ある屋敷地であったことがわかる。

明治4年（1871年）の廃藩置県後、仙台城の管轄が明治政府の兵部省に移管され、東北鎮台（明治6年〔1876年〕仙台鎮台に改称）が仙台城に設置されている。同年、鎮台病院が亀岡御殿に設置されている（『鶴城公記』）。鎮台病院移転後、明治13年（1880年）には勧業試験場になる（『宮城県仙台区全図』）。明治15年（1882年）には陸軍省用地となり（『仙台区及近傍村落之図』）、明治21年（1888年）仙台鎮台を廢止し第二師団を設置している。北方武家屋敷地区における江戸時代の道路の復元図（註3）によれば、調査区東側の道路は江戸時代には存在していない。明治26年（1893年）の「仙台市測量全図」において、現在の道路が初めてみられることから、第二師団が置かれた前後に、川内地区で大規模な道路整備として改変が行われた結果、現在の形に変わったと考えられている。以後、調査区周辺は第二師団の軍用地として終戦まで活用される。終戦後は米軍川内キャンプが設置されていた。

製作年代（元号）	西暦	拝領者・記載名	絵図・題名	備考（家格など）
正保2・3年	1645～1646	侍屋敷	奥州仙台城絵図	
寛文4年	1664	成田作太夫・高浜作門	仙台城下絵図	
寛宝・天和年間	1673～1684	古田長太夫・吉田寛左衛門	仙台城下絵図	
元禄4・5年	1691～1692	古山理左衛門・多喜勝之助・涌山重四郎	仙台城下五輪形御附	古田（虎の門 30匁空）
享保9年	1724	望山（定三）・伊達朝綱（村内）	仙台城下絵図	油山（前原・奉行 100匁空）
宝暦・明和年間	1751～1772	大町野監（勘助）・伊達出羽守（村内）	仙台城下絵図	伊達（一門・内守伊達家）
天明4～首政元年	1786～1789	望山大膳（勘助）・伊達六郎助（村内）	仙台城下絵図	望山（一家・射行・141匁空）・伊達（一門・内守伊達家）
安政3～6年	1856～1859	龜岡御殿	安政補正改革仙台府絵図	伊達宗家 12代藩主正家

第2表 主な絵図と拝領者・記載名



「仙台城下五輪形絵図」 元禄4・5年(1691・1692) (財) 斎藤報恩会所蔵



「安政補正改革仙台府絵図」 安政3～6年(1856～1859)

第3図 仙台城下絵図における調査区周辺図（註4）

註1 本報告書では紙面の都合、表中の絵図を掲載していない。仙台市教育委員会 2009 「仙台城・仙台市高速鉄道東西線開通跡地発掘調査報告書II - 仙台市文化財調査報告書第342集・東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 2006 「東北大大学埋蔵文化財調査年報19（第1分冊）」などに掲載されている絵図を参照されたい。

註2 仙台藩の家格は、一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・大刀上・召出・平士・組士・卒の順に分けられていた。

註3 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 2006 「東北大大学埋蔵文化財調査年報19（第1分冊）」

註4 高倉淳はか編 2005 「絵図・地図で見る仙台第一輯」 今野印刷株式会社、阿刀田今造 1936 「仙台城下絵図の研究」 東洋書院

## 第3章 調査の方法と経過

### 1 調査方法

調査地点は仙台城跡の北辺に位置し、絵図資料などによれば武家屋敷地とされており、これまでの発掘調査では、近世の遺構・遺物が発見されている。そこで仙台城跡二の丸地区北側の遺跡範囲を「北方武家屋敷地区」と呼称し(第4図)、高速鉄道東西線建設に伴う発掘調査を第1次調査とした。今次調査は、北方武家屋敷地区の第2次調査である。

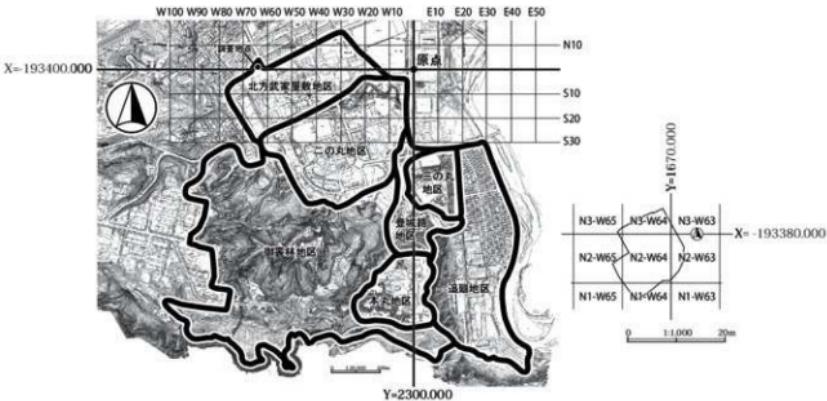
調査方法は、重機により近現代の盛土であるⅠ層および近代の整地層であるⅡ層を除去し、Ⅲ層以下は人力により掘削した。計測作業は、遺構平面図・断面図にはトータルステーションとデジタル写真および実測図を併用して作成し、レベルを記入した。写真撮影には、35mmのカラーボジ、モノクロとデジタルカメラ(600万画素以上)を使用した。出土遺物は出土年月日順に番号を付け、遺構別、グリッド別、層位別に取り上げ、登録を行った。登録遺物から報告書掲載遺物を抽出し、遺物実測および写真撮影を行った。

### 2 グリッド設定

調査用のグリッドを日本測地系に基づき設定した。平成17年度から行われている東西線予定路線内に係る発掘調査において設定された川内地区、青葉山地区、西公園地区の全域を網羅するグリッドの原点(日本測地系・X=193400m, Y=2300m)から10m×10mのグリッドを設定した(註1)。グリッドの名称は原点から、Y軸は北方向をN、南方向をSとし、X軸は東方向をE、西方向をWとした。原点からの方向と距離によりN1-E1 グリッド(北へ0~10m、東へ0~10m)、S2-W2(南へ10~20m、西へ10~20m)などとし、表記した。

### 3 調査経過

発掘調査の実施期間は平成21年6月10日から7月28日である。6月10日に除草作業、6月11日に調査区南側および東側の防護柵を設置し、器材などを搬入した。6月15日から重機と人力による掘削を開始したところ、調査対象面積のうち調査区中央部と西部を除く周縁部分は、大規模な攪乱を受けていることが判明した。このため実質的な調査面積は78m<sup>2</sup>となった。6月22日にⅢ層の遺構検出状況を記録し、遺構の掘削を開始した。その後Ⅲ層を除去し、Ⅳ層、V層の各層上面で遺構検出作業を行い、遺構を掘削した。7月14日にV層検出遺構を完掘し、記録した後、V層を除去し下層調査を実施した。7月24日に調査区の埋め戻しを終了し、調査前現況へ復旧した。7月28日すべての作業を終了した。



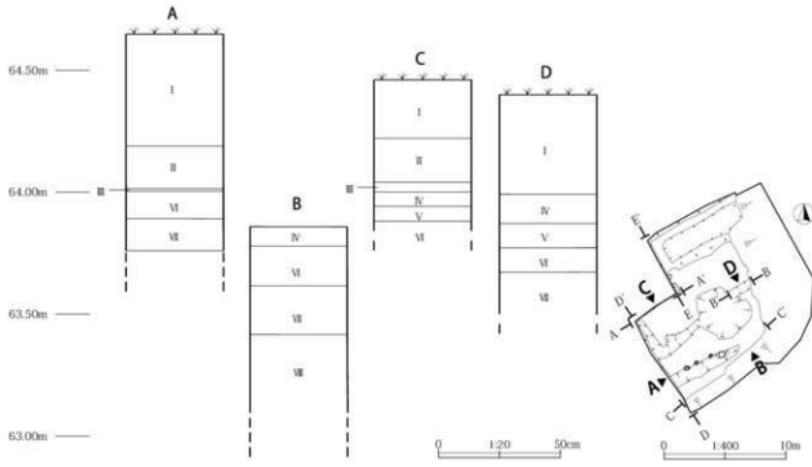
第4図 地区分とグリッド配置図

註1 仙台市教育委員会 2007 「川内A道路-仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書I」- 仙台市文化財調査報告書第312集

## 第4章 調査の成果

### 第1節 基本層序

調査の結果、基本層序はⅠ～Ⅷ層を確認した。そのうちⅢ～V層の各層上面で遺構が検出された。Ⅰ層は近現代の盛土である。Ⅱ層は第二師団による盛土・整地層とみられ、細分6層が確認された。Ⅲ層は3～5cmの礫や3cm以下の炭化物を含む砂質シルト層で第二師団以前の整地層である。層厚は3～10cmである。調査区東側には分布しない。Ⅳ層は、主に調査区の東側で分布が確認された盛土・整地層である。西側では調査区北壁のみ確認できた。暗褐色のシルトに褐色灰色の砂質シルトが小ブロック状に混じっている。層厚は6～12cmである。V層は砂質シルトを主体とし、5mm以下の粗砂を多量に含む層である。南側を除く調査区全域で確認できた。出土遺物の年代から近世の整地層と考えられる。VI層以下は自然堆積層である。VI層は粘土質シルトで、調査区の西側から東側に緩やかに傾斜している。VII層は暗褐色の粘土質シルトで調査区の西側から東側に傾斜している。VIII層は黄褐色の粘土質シルトである。

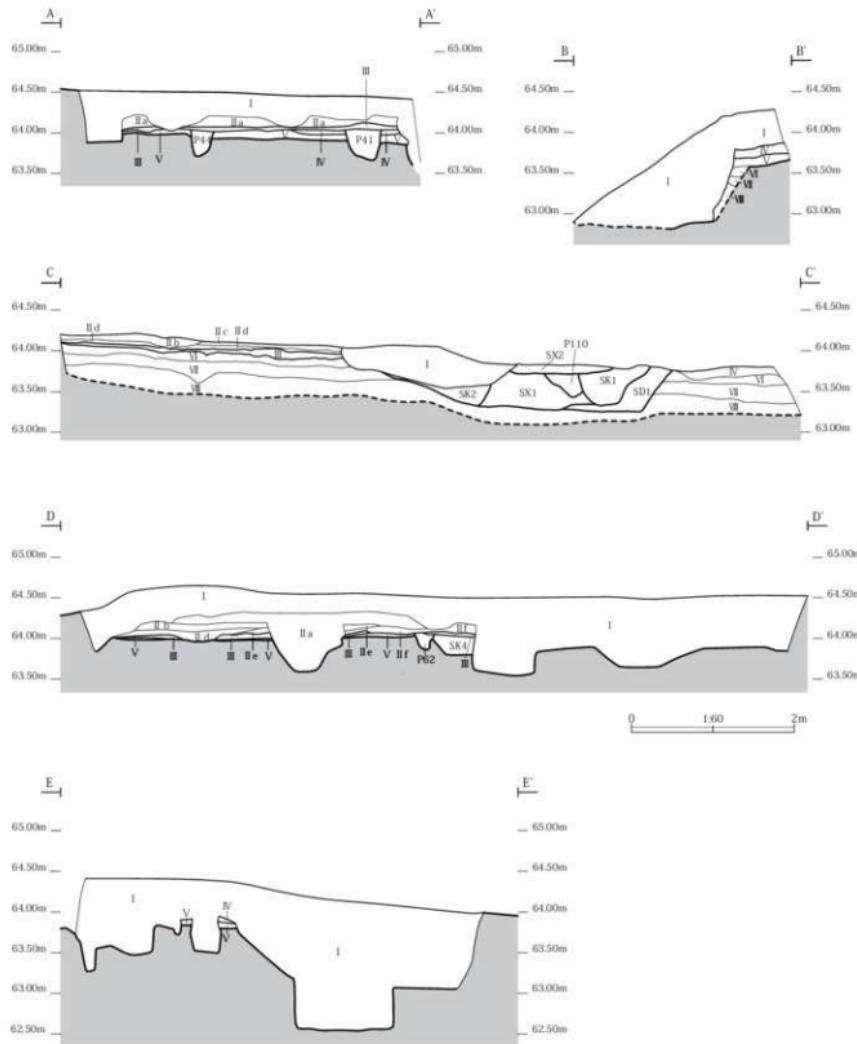


第5図 基本土柱状図と断面位置図

層名	土色	色	土質	備考
I	10YR2/2	黒褐色	シルト	径2～20mmの礫、砂を含む
II a	10YR7/6	明褐色	砂質シルト	灰褐色(2.5Y6/2) 粘土質シルト小ブロック、径5～30mmの礫を微量含む
II b	10YR7/6	明褐色	砂質シルト	灰褐色(10YR4/2) 粘土質シルトを少額、径3mm以下の炭化物、白色粉を微量含む
II c	10YR9/2	灰褐色	砂質シルト	白色粉少量、径1～2mmの炭化物を微量含む
II d	10YR9/2	灰褐色	砂質シルト	白色粉少量、褐色(10YR4/1) 粘土質シルトを微量含む
II e	2.5Y6/6	明褐色	砂質シルト	灰褐色(10YR5/2) 粘土質シルト小ブロックを少額、白色粉を微量含む
II f	10YR5/2	灰褐色	砂質シルト	灰褐色(10YR5/2) 粘土質シルトブロックを少額、白色粉、径3～5mmの礫を微量含む
III	10YR4/1	褐色	砂質シルト	明褐色(10YR6/6) 灰褐色(10YR5/3) 粘土質シルト小ブロックを少額含む
IV	10YR3/1	黒褐色	シルト	にごり灰褐色(10YR5/3) 粘土質シルト小ブロックを少額含む
V	2.5Y5/2	暗褐色	砂質シルト	径3～5mmの砂礫、白色粉を微量含む
VI	10YR6/4	にごり灰褐色	粘土質シルト	自然堆積層、白色粉を微量含む
VI	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	自然堆積層、白色粉を微量含む
VII	10YR5/6	暗褐色	粘土質シルト	自然堆積層、径1～3mm以下の礫、白色粉を微量含む

第3表 調査区基本土層番記表

## 第1節 基本層序



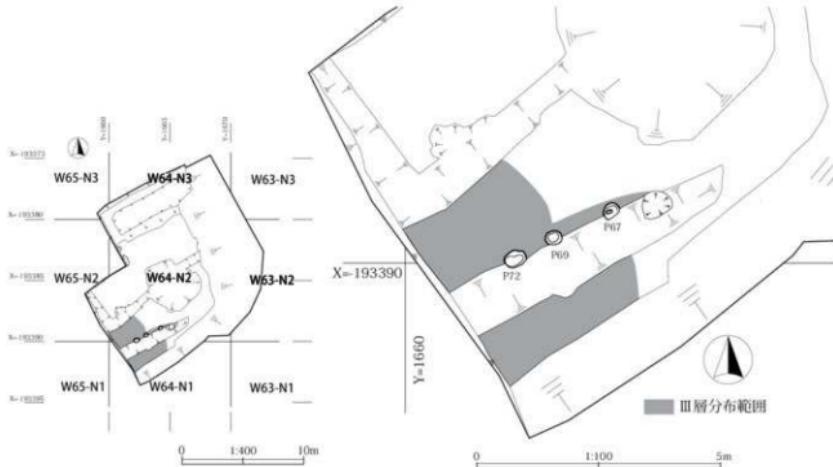
第6図 調査区壁断面図

## 第2節 検出遺構と出土遺物

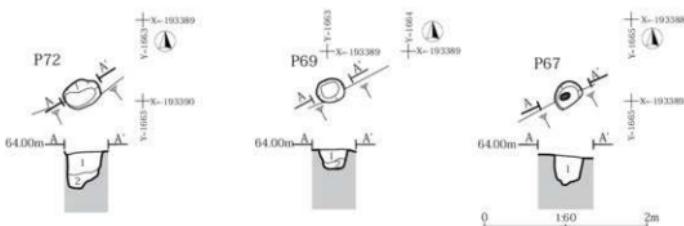
### 1 III層上面

III層はN1-W64～N2-W64グリッドにかけて、南北4.00m、東西4.60mの限られた範囲でのみ確認された整地層である。調査区の北東部分では、第二師団の整地の際に削平されており、層の分布を確認することができなかった。III層上面の標高は調査区南西側が64.05m、北西側が64.15m、東側が63.99mで、おむね平坦である。

III層の上面で確認した遺構はピット3基である。それぞれのピットの規模を第5表に示す。各遺構堆積土中からは遺物の出土は認められなかった。



第7図 III層分布図・遺構配置図



第8図 III層検出遺構平面図・断面図

遺構名	組番	寸法	色	土質	備考	
					横	縦
P72	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	(白色)と中細、灰褐色(10YR3/2)粘土質シルトブロックを少量、径1cm以下の炭化物を微量含む	
	2	10YR4/2	灰褐色	砂質シルト	灰褐色(10YR5/2)粘土質シルト・トロカート、径3mm以下の炭化物を少量含む	
P69	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	(白色)と中細、灰褐色(10YR3/2)粘土質シルト・トロカートを少量、径1cm以下の炭化物を微量含む	
	2	10YR4/2	灰褐色	砂質シルト	灰褐色(10YR5/2)粘土質シルト・トロカートを少量、径3mm以下の炭化物を微量含む	
P67	1	10YR5/2	灰褐色	砂質シルト	径5～30mmまでの塊、白色砂を中量含む	

第4表 III層検出遺構層位記表

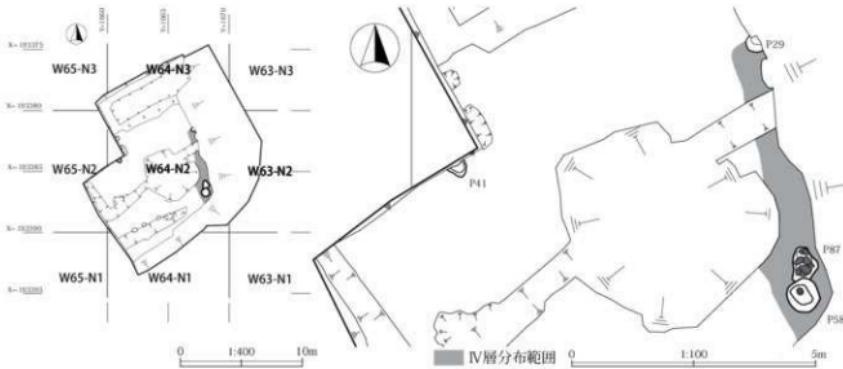
遺構名	長軸	短軸	深さ	備考		単位 cm
				横	縦	
P72	48.0	(19.0)	46.0	南北平野は第1回の土壌によって埋められる		1
P69	34.0	28.0	23.0	南北平野は第1回の土壌によって埋められる		8
P67	36.0	(19.0)	37.0	南北平野は第1回の土壌によって埋められる、底面に斜面あり		8

第5表 III層ピット計測表

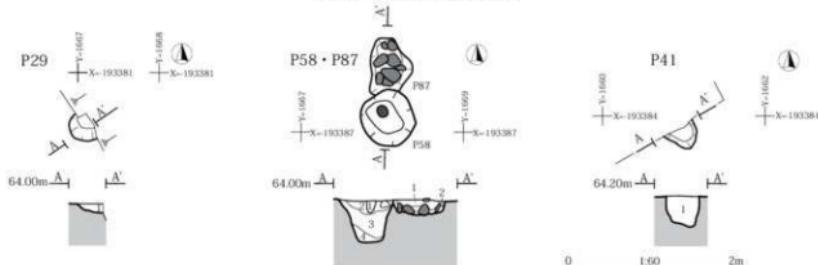
( ) の数値は残存値を示す

## 2 IV層上面

IV層はN2-W64 グリッド東側の、ごく限られた範囲で分布が確認された整地層であるが、壁断面の観察から本来は調査区全域に存在していたと推測される。IV層上面の標高は北西側が 63.99m、東側が 63.88m、南東側が 63.77m と、南東方向へ若干傾斜している。IV層上面で検出した遺構は、調査区東側のIV層分布範囲内でピット3基、第6図中のA-A'壁面でピット1基の計4基である。それぞれの規模と重複関係を第7表に示す。P29の堆積土中から陶器片1点が、P58の堆積土中から磁器片2点がそれぞれ出土しているが、いずれも細片であり図示し得なかった。



第9図 IV層分布図・遺構配置図



第10図 IV層検出遺構平面図・断面図

遺構名	番号	土色	色	土質	備考
P29	1	TOYR3/1	黒褐色	シルト	径 3～5 mm炭化物を少量、径 5 mmの小礫を微量含む
	1	TOYR5/2	灰褐色	砂質シルト	砂質、白粉を少量、径 2 mmの炭化物粒、径 1 mmの小礫を微量含む
	2	TOYR5/4	灰褐色	粘土質シルト	径 5 mmの炭化物粒、白粉を微量含む
P58	3	TOYR3/2	黒褐色	粘土質シルト	浅褐色 (2.5Y7/4) 粘土ブロック下部に少量加わる
	4	TOYR5/6	黒褐色	粘土質シルト	浅褐色 (2.5Y7/4) 粘土ブロック下部に少量加わる
P87	1	TOYR5/3	灰褐色	砂質シルト	径 5 mm以下の黒褐色、黒褐色 (1.0YR3/11) シルト、陶化鉄粒を少量含む
	2	TOYR3/1	黒褐色	粘土質シルト	径 20～30 mmの黒褐色、径 1 cm以下の小礫を少量含む
P41	1	TOYR3/2	黒褐色	シルト	灰褐色 (10YR5/3) 砂質シルトを少量含む

第6表 IV層検出遺構土層注記表

遺構名	長軸	短軸	深さ	備考	単位cm
P29	(32.0)	(24.0)	(10.0)	東部崖を近代の風化により削平される	10
P58	7.0	6.8	53.0	柱塗、P87を切る	10
P87	(7.4)	5.2	20.0	堆積土 2 層に多數の粗研磨石を含む、P58に切られる	10
P41	(28.0)	(39.0)	(28.0)	P42に切られる、P90を切る	10

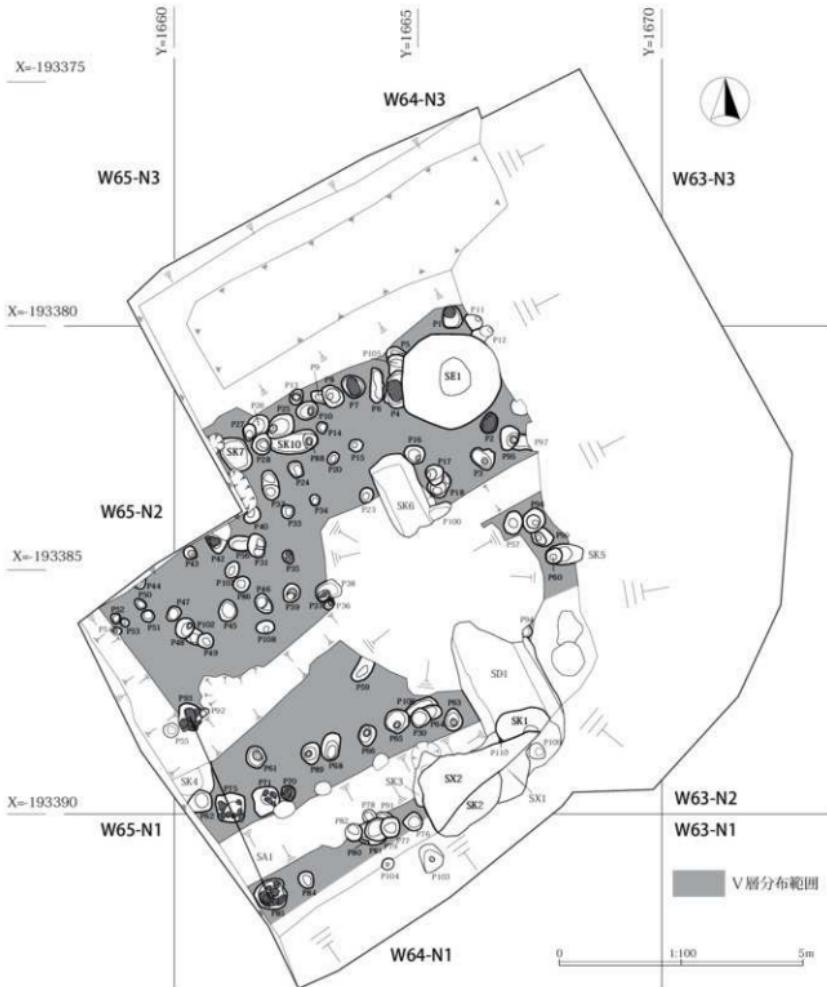
第7表 IV層ピット計測表

( ) の数値は残存値を示す

## 3 V層上面

V層は調査区ほぼ全域に確認された整地層である。層厚は調査区南端部分で約3cm、北半部で約12~13cmと差が大きいことから、VI層以下にみられる旧地形の傾斜を均すことを目的にしていたと推測される。V層上面の標高は、南北側で64.01m、北西側で63.85m、東側で63.68mと、東側に向かい緩やかに傾斜している。

V層上面で検出された遺構は、柱列跡1列、溝跡1条、井戸跡1基、土坑8基、性格不明遺構2基、ピット92基である。

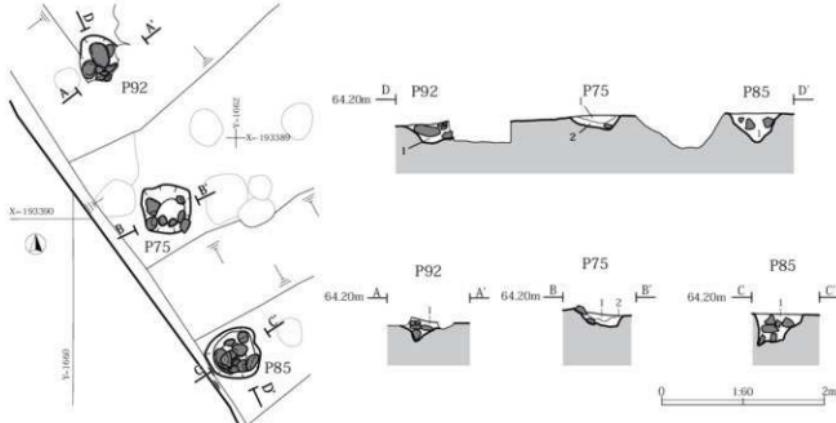


第11図 V層分布図・遺構配置図

## (1) SA1柱列跡(第12図、第8表)

N2-W64・N1-W64グリッドに位置し、調査区西壁沿いに南北方向に並ぶ3基の柱穴(P92・P75・P85)からなる。規模は、全長4.60m、柱間約2.0m(6尺6寸)である。各柱穴は長径8~32cmの自然縫を根固め石としている。P92は南側と西側を現代の擾乱に切られ、東側はP93に切られる。他の2基は、重複関係はない。主軸はN-26°-Wである。P92の北側に同様な柱穴はみられないことから、これに続く北側の柱穴はないと考えられる。P92の規模は長軸47cm、短軸42cm、深さ30cmで、平面形は不整形である。P75の規模は長軸56cm、短軸52cm、深さ22cmで、平面形は方形である。P85の規模は長軸72cm、短軸64cm、深さ32cmで、平面形は不整円形である。

遺物はP75の1層中より碁石が1点出土している。



第12図 SA1柱列跡平面図・断面図

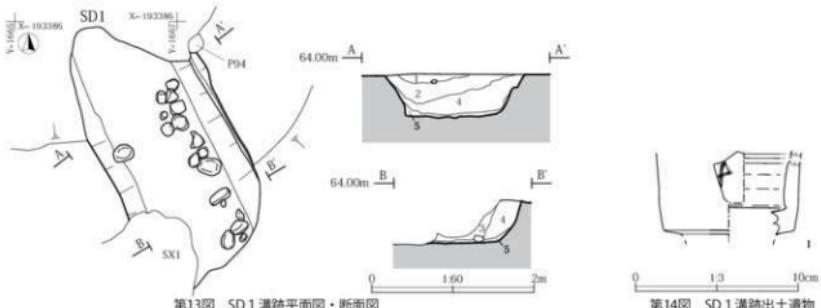
遺構番号	柱名	土色	色	土質	備考
SA1-P92	1	7.5YR6/2	灰褐色	砂質シルト	径1~3cmの縫、白色糸を少量含む、径19~32cmの自然縫を根固め石として使用
SA1-P75	1	10YR5/3	にふく黄褐色	砂質シルト	無化鉄糸を少量含む
	2	10YR6/6	明褐色	砂質シルト	無化鉄糸を少量含む、径8~20cmの自然縫を根固め石として使用
SA1-P85	1	10YR6/4	にふく黄褐色	粘土質シルト	(10YR3/1) 粘土質シルト中量混入、径1~2cmの縫、砂を少量含む、7~26cmの自然縫を根固め石として

第8表 SA1柱列跡土層注記表

## (2) SD1溝跡(第13・14図、第9・10表)

N2-W64グリッドに位置する溝跡である。北側は現代の擾乱によって切られており、南側はSK1土坑に切られるため、本来の全長は不明であるが、調査区域外へと延びているものと推測される。主軸方向はN-25°-Wである。検出長3.44m、最大幅1.78m、深さ54cmを測り、断面形は底面が平坦な逆台形状で、比較的直線的に立ち上がる。底面標高は南側が約5cm低い。堆積土は5層からなり、1~4層はその内容物と堆積の乱れ方から、人為的に埋め戻されたものと推測される。一方5層は、非常に粒子の細かい粘土を基調とし、層中に砂をごく薄く、層中に含んでいることから、水の影響を受けた自然堆積層と考えられる。

遺物のほとんどは、埋め戻し土と考えられる1~4層中から出土したもので、瓦2点、陶器2点、土師質土器4点、磁器4点、金属製品1点、銭貨2点を数える。磁器では18世紀の肥前産の火入れ、あるいは香炉(第14図-1)が見られるが、他の出土遺物はいずれも細片のため器種は不明である。5層からの出土遺物は銭貨1点のみである。寛永通宝だが腐食が著しく、古寛永であるか新寛永であるかは判別し得なかった。また、溝の東側では、5層上面付近から直径10~30cm前後の円縫・角縫が18点、疎らに並ぶような形で検出された(図版2-7)。本遺構に本来的に伴う何らかの構造の一端ではないかと推測されるが、部分的な検出のため詳細は不明である。



第13図 SD 1 溝跡平面図・断面図

第14図 SD 1 溝跡出土遺物

探査番号	層位	土色	土質	備考			
				種別	器種	部位	胎土 文様等
SD1	1	10YR6/4	に赤い斑状色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR4/7)	粘土質シルトブロック少多量、深1~10cm以下の土中で少量、白色粒を微量含む	
	2	10YR6/2	に赤い斑状色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR4/7)	シルト 3mm以下の中性化物質、深1~10cmの土中に少、白色粒 (2.5Y6/3) 砂を微量含む	
	3	10YR6/4	に赤い斑状色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR4/7)	シルト 3mm以下の中性化物質、深3mm以下の土中で少量、白色粒を微量含む	
	4	10YR6/6	明褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR4/2)	粘土質シルトブロック多量、深1~2cmの土中で少量、深3mm以下の中性化物質、白色粒を微量含む	
	5	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	灰褐色 (2.5Y6/3)	シルト 3mm以下の中性化物質を少量、に赤い斑状色 (2.5Y6/3) 砂を微量含む	

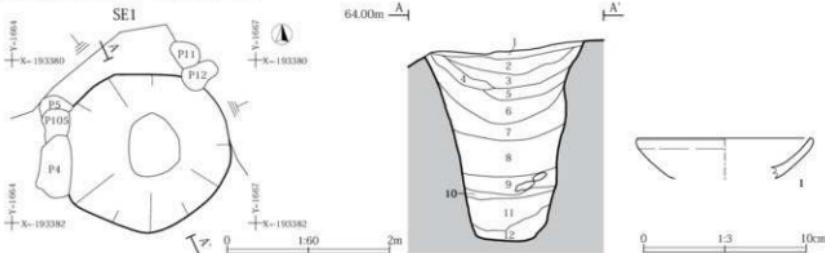
第9表 SD 1 溝跡土層注記表

探査番号	写真回数番号	道査名・層位	種別	器種	部位	胎土 文様等	法線 (cm)	底深 (cm)	高さ (cm)	産地	時期	備考	登録番号
14.1	SD1-1	縫隙	灰褐色	大入れ子 (ササ)	全体	灰褐色	—	—	(5.50)	肥津	18世紀	—	II
14.2	SD1-5	縫隙	灰褐色	全体	全体	灰褐色	—	—	—	—	—	—	II
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	II

第10表 SD 1 溝跡出土遺物観察表

## (3) SE1 井戸跡 (第15・16図、第11・12表)

N2-W64 グリッドの北東側に位置する素掘りの井戸跡で、東側を P12 に、西側を P4・5・105 に切られる。上面径 1.95 ~ 2.10 m の円形で、深さ 2.44 m である。堆積土は 12 層からなり、最下部の 12 層以外は井戸の埋め戻しに伴う堆積土である。遺物は 5 点出土しており、3 層で瓦 1 点、陶器 1 点、土師質土器 1 点、磁器 1 点、4 層から土師質土器 1 点が出土した。いずれも微細な破片のため、図示し得たものは少ないが、陶器 1 点を図示した。17 世紀初頭の唐津窯産皿である (第 16 図-1)。



第15図 SE 1 井戸跡平面図・断面図

第16図 SE 1 井戸跡出土物

探査番号	層位	土色	色	土質	備考			
					種別	器種	部位	胎土 文様等
SE1	1	10YR6/3	に赤い斑状色	砂質シルト	灰褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト小ブロック、白色粒を多量、深5~10cmの土中で少量、深20cmの土中で含む		
	2	10YR5/3	に赤い斑状色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト少量、深10cmの土中で少量、灰褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト小ブロックを含む		
	3	10YR4/2	灰褐色	シルト	灰褐色 (10YR6/2)	粘土質シルトブロック、深3~20cmの中性化物質を少量、深1~2cmの土中で含む		
	4	10YR4/2	に赤い斑状色	シルト	灰褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト少量、深1~2cmの中性化物質を含む		
	5	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト少量、深3~5cmの中性化物質、深1~2cmの土中で含む		
	6	2.5Y6/4	に赤い斑状色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR4/2)	シルト、深3~5cmの中性化物質を少量、白色粒を微量含む		
	7	10YR3/3	明褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト少量、深3~5cmの中性化物質を中量、深3~5cmの中性化物質を少量、無比料を微量含む		
	8	10YR2/2	明褐色	シルト質粘土	灰褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト少量、無比料を微量含む		
	9	10YR2/2	明褐色	シルト質粘土	灰褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト少量、無比料を微量含む		
	10	10YR3/1	明褐色	シルト質粘土	灰褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト少量、無比料を微量含む		
	11	10YR5/2	灰褐色	シルト質粘土	灰褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト少量、無比料を微量含む		
	12	10YR3/1	明褐色	粘土	灰褐色 (10YR6/2)	粘土少量、深10cm、無比料を含む		

第11表 SE 1 井戸跡土層注記表

探査番号	写真回数番号	道査名・層位	種別	器種	部位	胎土	文様等	法線 (cm)	底深 (cm)	高さ (cm)	産地	時期	備考	登録番号
16-1	5-3	SE1-3	縫隙	陶器	瓶	白拂~底深7~8cm	中空	—	—	—	肥津	17世紀前半	—	II

第12表 SE 1 井戸跡出土遺物観察表

(4) 土坑（第17・18図、第13・14表）

調査区内に8基の土坑が検出された。土坑としたSK1～7・10土坑は、その形状や規模にあまり共通性は認められないが、いずれも遺構底面が明瞭に検出されたことから、後述のSX2性格不明遺構とは区別している。

① SK1 土坑 N2-W64 グリッドの南東に位置する。確認された切り合い関係から、SX2性格不明遺構より古く、SD1溝跡、SX1性格不明遺構、P110より新しい。遺構の南東側は現代の擾乱により削平されている。検出規模は、長軸114cm、短軸76cm、深さは45cmである。平面形は本来不整梢円形と考えられる。底面は平坦で直線的に立ち上がる。堆積土は2層からなり、ともに埋め戻しに伴う堆積層であると考えられる。

遺物は1層から陶器1点、土師質土器の皿3点、肥前産の磁器皿1点が出土した。陶器は17世紀初頭唐津産の大鉢あるいは大皿である。いずれも細片のため図示し得なかった。

② SK2 土坑 N2-W64・N1-W64 グリッドに位置する。北側と南東側を近現代の擾乱によって削平される。確認された切り合い関係からSK3土坑、SX1性格不明遺構より新しく、SX2性格不明遺構より古い。検出形状は不整形で、長軸172cm、短軸167cm、深さは26cmである。底面がやや北側に偏っており、底面からの立ち上がりは北側の一部でオーバーハングしている。堆積土は2層からなり、ともに埋め戻しに伴う堆積層である。

遺物は2層から瓦質土器の火入れが1点出土しているが、細片のため図示していない。

③ SK3 土坑 N2-W64 グリッドに位置する。北側は近代の建物跡に切られ、南東側はSK2土坑に切られる。規模は長軸112cm、短軸62cm、深さ74cmである。平面形は南北方向に長い方形を基調としている。底面は中心がやや窪み、壁面の立ち上がりは急である。堆積土は単層で埋め戻しに伴うものと考えられる。遺物は出土していない。

④ SK4 土坑 N2-W64 グリッドに位置する。北側は擾乱に切られ、南西側は調査区域外へ続く。南側はP62に切られる。部分的な検出のため平面形は不明である。確認された規模は、長軸86cm、短軸56cm、深さは22cmである。底面は平らで壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は単層で埋め戻しに伴うものと考えられる。遺物は出土していない。

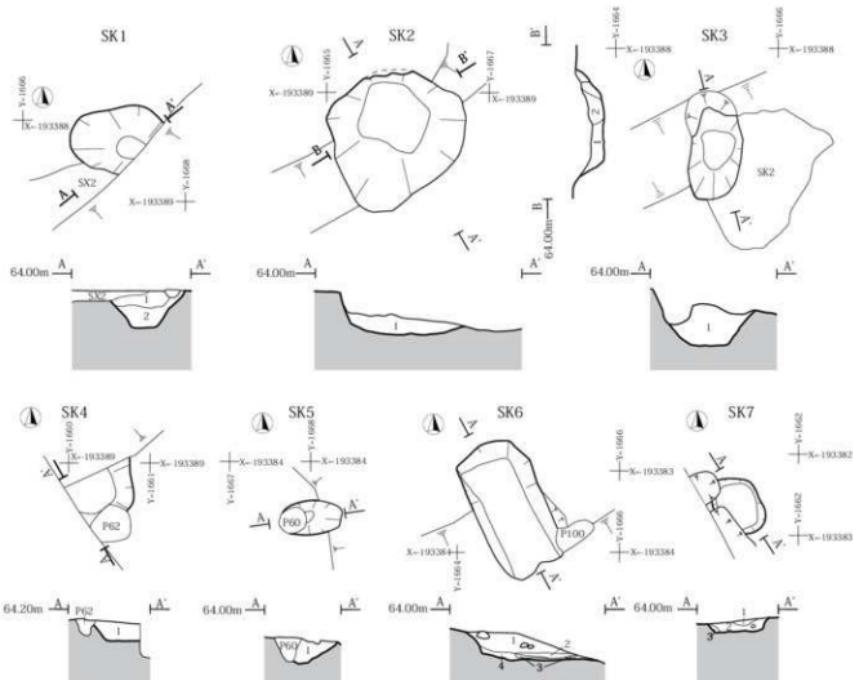
⑤ SK5 土坑 N2-W64 グリッドに位置する。東側はわずかに削平され、西側をP60に切られる。規模は長軸64cm、短軸40cm、深さ30cmである。平面形は梢円形である。堆積土は単層で、埋め戻しに伴うものと考えられる。遺物は出土していない。

⑥ SK6 土坑 N2-W64 グリッドに位置する。南側を現代の擾乱により削平され、南東側をP100に切られる。検出した形状は長方形であり、長さ180cm、幅86cm、深さ34cmである。底面標高は南側が約4cm低い。堆積土は4層からなり、1・2層はその内容物と堆積の乱れ方から、人為的に埋め戻された土と考えられる。一方3・4層は、やや細かい粒子の粘土を基調とし、特に4層は層中に砂をごく薄く、層状に含んでいることから、いずれも水の影響を受けた自然堆積層と考えられる。

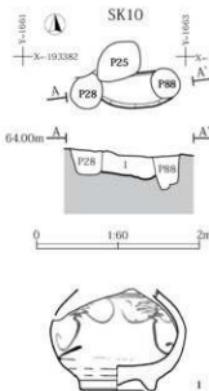
1層と2層から瓦2点、陶器では产地不明の鉢1点と唐津産の壺1点、磁器では17世紀中頃の肥前産油壺（第18図-1）と思われる磁器が1点と、同じく肥前産の器種不明細片が1点出土している。

⑦ SK7 土坑 N2-W64 グリッドに位置する。西側は擾乱に切られる。平面形は梢円形で、底面は東側に緩く傾斜しており、立ち上がりは急である。規模は長軸80cm、短軸56cm、深さ18cmである。堆積土は3層でいずれもその状況から人為的に埋め戻されたものと推測される。遺物は出土していない。

⑧ SK10 土坑 N2-W64 グリッドに位置する。西側をP25・28に切られ、東側をP88に切られる。規模は長軸64cm、短軸44cm、深さ24cmである。平面形は梢円形である。底面は多少凹凸がみられ、東側にやや傾斜している。堆積土は単層で、埋め戻しによるものと考えられる。遺物は出土していない。



第17図 SK 1～7・10土坑平面図・断面図



第18図 SK 6 土坑出土遺物

通標番号	層名	土色	色	土質	地質	
					堆積高(m)	堆積厚(m)
SK1	1	10YR5/2	灰黃褐色	粘土質シルト	にぶい黃褐色(10YR5/4)粘土質シルトブロック、径1cm以下の礫物、白色粒を少量。径1mm以下の粘土質ブロック、径18cmの塊を微量含む	
	2	10YR4/2	灰黃褐色	粘土質シルト	径5mm以下の礫物を少額。径5mm以下の礫化鉄粒。白色粒を微量含む	
SK2	1	7.5YR5/6	褐色	粘土質シルト	黒灰色(10YR4/1)粘土質シルト混入、径2mm以下の礫化物質を微量含む	
	2	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトを中量含む	
SK3	1	10YR6/4	にぶい黃褐色	粘土質シルト	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトを中量含む	
	2	10YR4/2	灰黃褐色	粘土質シルト	径5mm以下の礫化物質。径4mmの礫を微量含む	
SK4	1	10YR4/2	灰黃褐色	粘土質シルト	にぶい黃褐色(10YR5/4)粘土質シルトブロック、径3mm以下の礫化物質を少額。径3mm以下の礫化物質を微量含む	
	2	10YR5/2	黑褐色	砂質シルト	黒灰色(10YR3/1)のシルトブロック、径5mm以下の礫化物質を少額含む	
SK5	1	10YR5/3	にぶい 黃褐色	粘土質シルト	黒褐色(10YR3/1)のシルトブロック、径20cmの礫を微量含む。白色粒を微量含む	
	2	10YR3/2	黑褐色	粘土質シルト	黒褐色(10YR3/1)のシルトブロック、径2-5cmの礫を微量含む	
SK6	3	2.5YR5/2	褐灰色	砂	にぶい 黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトブロックを少量、礫化鉄粒、径2-5cmの礫を微量含む	
	4	10YR1/1	黒褐色	シルト質粘土	径5mm以下の礫化物質。砂を少量含む	
SK7	1	10YR5/4	にぶい 黄褐色	粘土質シルト	にぶい 黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトブロックを少額、礫化鉄粒、径2-5cmの礫を微量含む	
	2	10YR2/2	黑褐色	粘土質シルト	黒褐色(10YR4/1)粘土質シルトを少量含む	
SK8	3	10YR5/4	にぶい 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト小ブロック混入、礫化鉄粒を少額。径1-3cmの礫を微量含む	
	4	10YR5/2	灰黃褐色	粘土質シルト		
SK10	1	10YR5/2	灰黃褐色	粘土質シルト		
	2	10YR5/2	灰黃褐色	粘土質シルト		

第13表 SK 1～7・10土坑土層注記表

測定番号	真高(実測高)	通標名	層位	種別	基標	深幅	部位	崩土	文様等	走量(cm)	柱径(cm)	筒径(cm)	床地	時期	備考	付録番号
18-1	5-4	SK6	2層	礫層	油壺	7	体部→底部	市	染付	—	4.65	(6.22)	肥前	17世紀中期	付録に離れ砂、 崩入灰(8.32cm)	J9

第14表 SK 6 土坑出土遺物観察表

## (5) 性格不明遺構

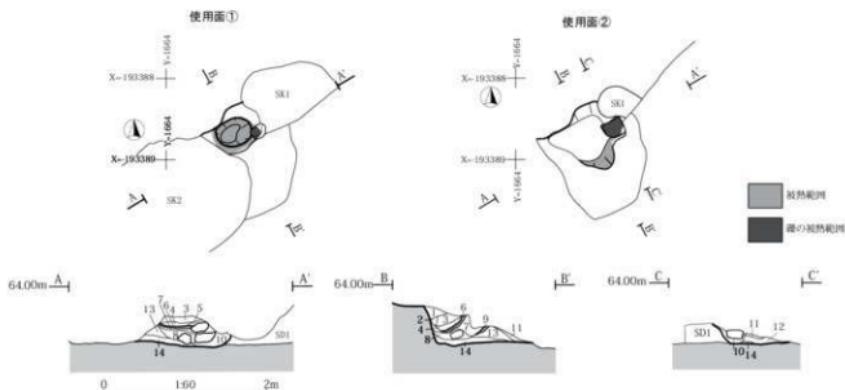
① SX1 性格不明遺構 N2-W64 グリッドの南東で検出された遺構で、細別 14 層の堆積土に分層される。顕著な被熱硬化範囲と堆積土中に多くの焼土粒子や炭化物粒子が認められることから、何らかの燃焼施設であった可能性が考えられる。検出範囲の西側と南側に、SK1・2 土坑に切られており、南側は近現代の削平によって大きく消失しているため、遺構本来の形状は不明である。堆積層の残存範囲は、東西 116cm、南北 134cm の不整形で、北側が比較的よく残存し、1～14 層までを合わせた堆積層の層厚は約 50cm である。被熱硬化面は 6 層と 9 層であり、それぞれ 7 層と 13 層が熱を受けたものと推測される。間層を挟んで確認される 2 層の被熱硬化面をそれぞれ遺構の使用面に伴って形成されたものと考えると、SX1 性格不明遺構には 2 時期の使用面が存在したものと推測される。遺物の出土は見られなかつたが、それぞれの使用面から 1 点ずつ、強い熱を受けた礫が確認されている。

・使用面① 7 層上面と 6 層被熱硬化範囲が相当する。6 層の被熱硬化範囲は長軸 44cm、短軸 34cm の楕円形である。中央部が約 20cm 程浅く窪んだ擂鉢状に確認され、中央部は特に硬化が著しい。7 層下部に存在する 8 層が、後述する使用面②の被熱硬化範囲である 9 層を部分的に崩していることから、7・8 層を基盤として新たな使用面を形成したものと推測される。1～5 層は使用面①が廃絶後に埋め戻された土層と考えられ、特に 4・5 層中には 6 層に由来すると思われる多量の焼土粒子が含まれている。

・使用面② 使用面①の検出上面の下部約 14cm で確認された、13 層上面とその上部の 9 層被熱硬化範囲が相当する。被熱硬化範囲は長軸 68cm、短軸 66cm の不整形で考えられるが、範囲中央部から北半を 8 層により崩されているため、9 層より上層に確認された範囲は南半部に弧状に残存するのみであった。10～12、14 層は、部分的に被熱硬化範囲の下で確認された堆積層であるが、焼土粒子や炭化物粒子は、上層で確認された層に比べ微量であることから、13 層を含めて使用面②の基盤と推測される。

図版 4-2-3 は、使用面①において確認された自然礫である。直径約 20cm、厚さ約 15cm の円礫で 7 層中に埋没した状態で検出された。検出上面のみに強い被熱による赤変が認められる。図版 4-6・7 は使用面②において確認された軟質凝灰岩の切石である。約 20cm 前後の直方体状に整えられたもので、上面および北・南側面に強い被熱による赤変が認められる。このうち北側面では、面全体に被熱が及んでおらず、西側から漸移的に赤変が認められなくなる。

これら 2 点の出土礫に見られる被熱赤変の状態からは、半ば土に埋まった状態で火にさらされる様な状況が推測されることから、各使用面における何らかの構造物の一部であった可能性も考えられるが、断片的な検出のため詳細は不明である。



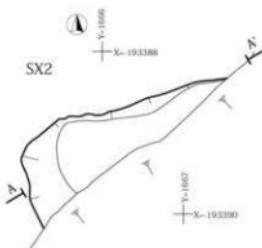
第19図 SX1 性格不明遺構平面図・断面図

登録番号	顧名	土色	土質	備考
1	2SY7/3	浅褐色	粘土質シルト	粘土は小プロック状、粘土プロックを多量、径2mm以下の礫物を少量含む
2	10YR6/6	明褐色	粘土質シルト	粘土質シルト
3	10YR2/2	灰褐色	粘土質シルト	径2mm以下の礫物
4	2SY4/4	オーリーブ褐色	シルト	粘土
5	5YR8/3	淡褐色	シルト	粘土、径3mmの小礫を微量含む
6	2Y6/8	明褐色	粘土	
SX1				
7	10YR4/3	にごい黄褐色	粘土質シルト	粘土5mm以下の小礫を微量含む
8	10YR3/4	にごい黄褐色	粘土質シルト	径2mm以下の地性プロックを中層、10YR5/1 関灰色の粘土小プロック。径1~3cm礫を少額、径3mm以下の礫物を微量含む
9	2SY8/4	にごい黄褐色	シルト	
10	10YR2/3	にごい黄褐色	粘土質シルト	径3mm以下の地性プロックを微量含む
11	2.5Y7/2	灰褐色	粘土質シルト	
12	10YR5/4	にごい黄褐色	粘土質シルト	灰褐色(2SY7/2)粘土層、径1~10mmの礫物を少額、径1mm以下の地性プロック、径2mm以下の小礫を微量含む
13	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	径1~2mmの地性プロック。明褐色(10YR7/6)毎石質シルト小プロック、灰白色(2SY7/1)粘土層。径3mm以下の礫物を微量含む
14	10YR6/6	明褐色	粘土質シルト	灰褐色(10YR4/1)粘土シルトを中層、にごい黄褐色(10YR6/4)砂質シルト、にごい黄褐色(10YR6/4)粘土小プロックを少額、径3mm以下の小礫を微量含む

第15表 SX1 性格不明遺構土層注記表

(2) SX2 性格不明遺構 N1-W64・N2-W64 グリッドに位置する。北・南側を近現代の搅乱による削平を受けている。SKI ~ 3土坑、SX1 性格不明遺構の上部に存在し、いずれの遺構よりも新しい。検出長は長軸 296cm、短軸 110cm で深さ 20cm である。堆積土は單層である。遺構の形状が不明瞭であることから、土坑として掘られたものではなく、窟んだ部分に土を入れ、平坦に均した痕跡であると判断し、性格不明遺構とした。

出土遺物は、瓦 2 点、陶器 5 点、土師質土器 9 点、磁器 8 点、金属製品 3 点が出土している。陶器では中国漳州窯の大皿や朝鮮産陶器と見られる碗、磁器では中国産 13 ~ 14 世紀代の壺か茶入れ、17 ~ 19 世紀にかけての肥前産小杯や碗、金属製品では刀子柄などが出土している。このうち 5 点を図化した(第 21 図・17 表)。



第20図 SX2性格不明遺構平面図・断面図

登録番号	顧名	土色	土質	備考
SX2	1	10YR6/2	灰褐色	粘土質シルト   少量、径1~2cmの礫物を微量含む

第16表 SX2性格不明遺構土層注記表



第21図 SX2性格不明遺構出土遺物

登録番号	写真付	遺構名・部位	種別	器種	部位	胎土	文様等	法線 (cm)	产地	時期	備考	登録番号	
21.1	5-5	SX2 1 層	磁器	小皿	体部~底盤	素	一	2.75 (3.75)	肥前	12世紀中期	白釉・底付に砂、最大径 (6.20cm)	J14	
21.2	5-6	SX2 1 層	磁器	碗	口縁~底盤	素	一	3.80 (3.75) 4.90	肥前	12世紀?	白釉・底付に砂、ロウ口 (左)	J15	
21.3	5-7	SX2 1 層	磁器	碗	口縁~底盤	やや粗	一	12.00 (6.80) 2.80	在地	近世	かわらけ、ロウ口 (左)	J22	
21.4	5-8	SX2 1 層	陶器	大皿	口縁	素	絞物特有	— (2.85)	中国(瀬戸窯)	10世紀末~11世紀初頭	11世紀初頭	19	
21.5	5-9	SX2 1 層	陶器	碗?	体部~底盤	やや粗	从施	5.65 (4.90)	朝鮮?	17世紀~	高麗系碗?	J17	
—	5-10	SX2 1 層	磁器	碗?	口縁	素	青磁	3.00	— (2.25)	中国(景德镇窯)	13~14世紀?	手入れ? 最大径 (4.50cm)	J10
—	5-11	SX2 1 层	陶器	不明(袋物)	体部~底盤	やや粗	底付	1.40	在地	18世紀以降	海トナリ・底輪の上に黒釉	J15	

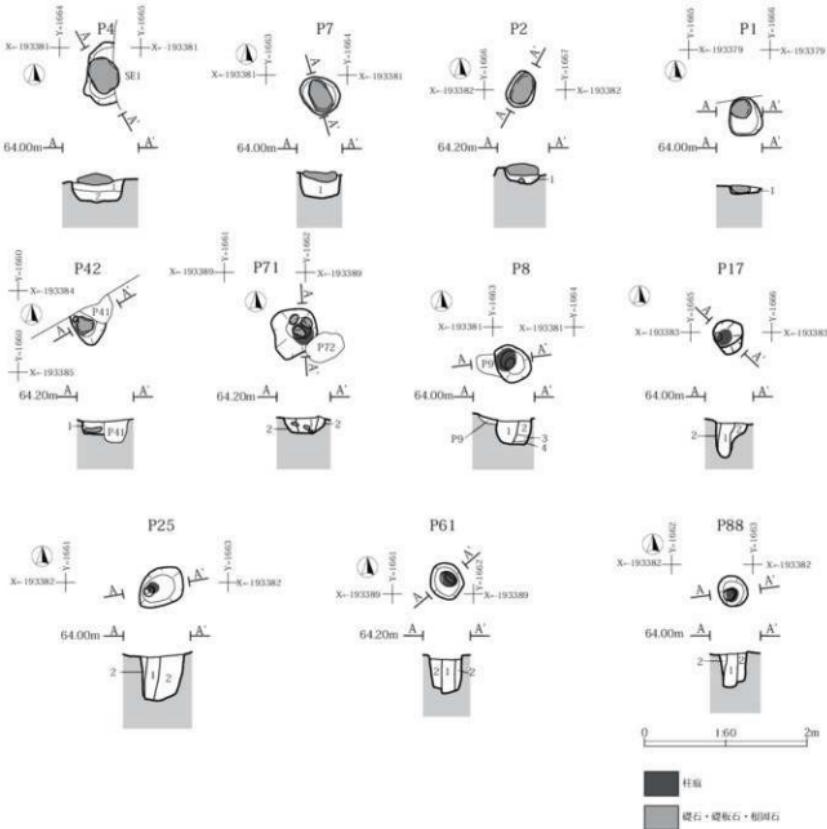
第17表 SX2性格不明遺構出土遺物観察表

## (6) ピット

V層で92基のピットが検出された。

礎石を持つもの2基(P4・7)、礎石と根固め石をもつもの1基(P2)、礎板石をもつもの2基(P1・42)、礎板石と根固め石をもつもの1基(P70)、柱痕と根固め石をもつもの1基(P71)、柱痕が認められるもの14基(P3・8・10・13・17・25・48・61・63・65・66・89・90・103)が検出されている。そのうち断面に柱痕が認められるピットを中心に図示した(第22図、第18表)。

遺物は9基から12点出土しているが(第24表)、細片のため図示していない。P26から朝鮮産と見られる陶器片が1点出土している(図版5-12)。



第22図 V層面上検出ピット平面図・断面図

品目番号	品名	主色	色	寸法	備考
P4	1 10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	礫石、径 5 mm以下の変化物利、黄褐色 (2.5Y5/3) 砂を少量含む	
	2 10YR6/4	にふい 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色 (10YR3/2) シルトブロックを少量含む	
P7	1 10YR3/2	黒褐色	シルト	礫石、径 3~10 mmの変化物少量、無灰灰粒、径 1 cmの根状物少量含む	
P2	1 10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	無灰灰粒、にふい 黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルトを少量含む	
P1	1 10YR4/2	黒褐色	粘土質シルト	無灰灰粒	
P42	1 10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト	礫石	
P71	1 10YR4/1	無灰灰	粘土質シルト	柱状、粗面めらか、表面物少量、径 5~10 mmの礫、砂、白色粘土を微量含む	
	2 10YR5/4	にふい 黄褐色	砂質シルト	黒褐色 (10YR3/1) シルト小ブロック、径 5 mm以下の小礫、砂、白色粘土を微量含む	
P9	1 10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱状、粗面めらか、表面物少量、砂を少量含む	
	2 10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱状、粗面めらか	
	3 10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト		
	4 10YR4/3	にふい 黄褐色	粘土質シルト	にふい 黄褐色 (10YR3/1) 粘土質シルトブロック中細、無灰灰粒、白色粘土を少量含む	
P17	1 10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	柱状、径 3~5 mmの変化物を少量含む	
	2 10YR5/3	にふい 黄褐色	砂質シルト	柱状、にふい 黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルトブロック中細、無灰灰粒、白色粘土を少量含む	
P25	1 10YR4/1	無灰灰	粘土質シルト	柱状、径 3~5 mmの変化物を少量含む	
	2 10YR6/4	にふい 黄褐色	粘土質シルト	にふい 黄褐色 (10YR4/1) 粘土質シルトを少量含む	
P61	1 10YR4/3	にふい 黄褐色	粘土質シルト	柱状、にふい 黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルトブロック、径 2~3 mmの礫を少量含む	
	2 10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	柱状、にふい 黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト小ブロック、径 3 mm以下の変化物を微量含む	
P88	2 10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	柱状よりはふい 黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト小ブロックが多い、無灰灰を微量含む	

第18表 V層ピット土層注記表

層番号	地盤	地盤名	寸法	層名	寸法(厚さ)	高さ	幅	奥行き	走査	備考	単位(cm)
P1	4.0	(14.0)	8.5	礫板岩	22		P53	32.0	30.0	20.0	
P2	43.0	3.00	20.0	礫石・粗面めらか	22		P56	(41.0)	30.0	16.0	P31に切られる
P3	52.0	32.0	44.0	武蔵川層	22		P57	47.0	36.0	30.5	
P4	74.0	(32.0)	32.0	礫石 P105を切る	22		P59	(52.0)	32.0	26.0	
P5	(36.0)	(16.0)	16.0	P105に切られる			P60	34.0	32.0	38.0	SK5を切る
P6	70.0	23.0	18.0				P61	46.0	40.0	47.0	
P7	50.0	40.0	10.0	礫石	22		P62	(48.0)	46.0	40.0	
P8	50.0	40.0	38.0	砂質 P9を切る	22		P63	46.0	38.0	22.0	上面に柱状
P9	(36.0)	(24.0)	14.0	P9に切られる			P64	(38.0)	24.0	24.0	P30に切られる。P106を切る
P10	36.0	10.0	10.0	砂質 P9を切る			P65	50.0	36.0	36.0	柱状
P11	36.0	10.0	30.0	P12を切る			P66	44.0	34.0	54.5	柱状 P34に切れる
P12	(34.0)	(6.0)	31.0	P11に切られる			P68	60.0	38.0	56.0	
P13	34.0	26.0	25.0	砂質			P70	38.0	29.0	21.0	礫板岩、粗面めらか
P14	24.0	18.0	6.0				P71	60.0	52.0	26.0	粗面めらか
P15	29.0	22.0	24.0				P73	—	—	—	次番
P16	44.0	34.0	25.5				P74	—	—	—	次番
P17	42.0	32.0	30.0	砂質 P18を切る	22		P75	56.5	52.0	22.0	SA1、粗面めらか
P18	54.0	(21.0)	48.0	P17に切られる			P76	41.0	35.0	20.0	
P19	—	—	欠番				P77	42.5	38.0	20.0	P78・P79・P91を切る
P20	26.0	(18.0)	20.0				P78	(28.0)	(24.0)	20.0	P77を切る。P77・P78・P91に切られる
P21	—	—	欠番				P79	(27.0)	(24.0)	20.0	P77・P78に切られる。P80・P81・P91を切る
P22	—	—	欠番				P80	(20.0)	(8.0)	14.0	P79・P82に切られる。P91を切る
P23	32.0	26.0	40.0				P81	(68.0)	48.0	31.0	P79・P80・P82に切られる
P24	36.0	30.0	12.0				P82	38.0	36.0	10.0	P79・P80・P81を切る
P25	64.0	40.0	6.0	柱状			P83	—	—	—	欠番
P26	45.0	40.0	39.0	P27に切られる。P28を切る	22		P84	36.0	32.0	16.0	
P27	34.0	24.0	35.0	P26に切られる。SK10を切る			P85	72.0	64.0	32.0	SA1、粗面めらか
P28	44.0	36.0	30.0	P26に切られる。SK10を切る			P86	34.5	11.0	20.0	
P30	40.0	36.0	54.0	P64・P106を切る			P88	30.0	28.0	4.0	SK10を切る
P31	50.0	34.0	38.0	P56を切る			P89	46.0	38.0	0.0	底面に柱状
P32	61.0	34.0	32.0				P90	(34.0)	(32.0)	22.0	柱状 P41・P42に切られる
P33	28.0	32.0	27.0				P91	(38.0)	(12.0)	1.0	P77・P78・P91に切られる
P34	2.0	18.0	14.0				P92	(38.0)	(12.0)	1.0	SA1、粗面めらか。P93に切られる
P35	28.0	21.0	19.0				P93	(4.0)	(12.0)	1.30	P92を切る
P36	24.0	19.0	13.0				P94	(4.0)	(14.0)	20.0	
P37	(28.0)	(20.0)	40.0	P38に切られる			P95	50.0	40.0	36.0	P92に切れる
P38	(48.0)	(38.0)	39.0	P37を切る			P96	—	—	—	欠番
P39	40.0	34.0	12.0				P97	(38.0)	(35.0)	41.5	P95を切る
P40	37.0	(28.0)	22.0				P98	49.0	44.0	38.0	
P42	(44.0)	(38.0)	22.0	礫板岩。P41に切られる。P90を切る	22		P99	(44.0)	38.0	22.0	
P43	28.0	25.0	2.0				P100	(34.0)	(12.0)	16.0	
P44	(12.0)	(28.0)	16.0				P101	—	—	—	欠番
P45	44.0	38.0	24.0				P102	(32.0)	32.0	20.0	P78・P49に切られる
P46	33.0	36.0	20.0				P103	(34.0)	34.0	2.0	SA1・粗面めらか
P47	33.0	36.0	20.0				P104	26.5	24.0	20.0	
P48	44.0	38.0	40.0	底面に柱状。P102を切る			P105	(32.0)	(26.0)	20.0	P74に切られる。P75を切る
P49	34.0	32.0	31.0	P102を切る			P106	(66.0)	(18.0)	17.0	P70・P64・P65に切られる
P50	26.0	20.0	9.0				P107	36.0	18.0	22.0	
P51	26.0	25.0	11.0				P108	38.0	27.0	35.0	
P52	22.0	19.0	18.0				P109	34.0	33.0	8.0	
P53	18.0	16.0	8.0				P110	52.0	(31.0)	25.0	NX2に切られる。SX1を切る
P54	(12.0)	(18.0)	28.0								E38

第19表 V層ピット計測表

測定番号	写真図版番号	直通名	直通名	基準	部位	直通	文様等	法量(cm)	底地	時期	備考	登録番号
								口径 底径	基面			
—	5-12	P26	1層	陶器	陶器	陶?	底部	—	—	(1.2)	朝鮮?	18世紀

第20表 P26遺物観察表

## 4 遺構外出土遺物

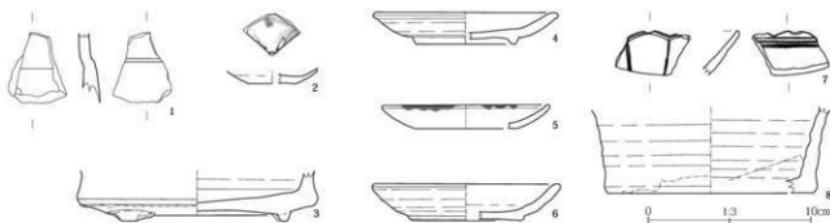
遺構外からの出土遺物は 205 点で、出土遺物全体（総点数 282 点）の 73% に及ぶ。このうち基本層から出土した遺物は、158 点（77%）で、I 層で 114 点、II 層で 8 点、III 層で 18 点、V 層で 18 点である。また搅乱からは 47 点（23%）である。内訳は、縄文土器 3 点、非クロコ土師器 1 点、ロクロ土師器 1 点、瓦 67 点、陶器 50 点、瓦質土器 6 点、土師質土器 23 点、磁器 40 点、石製品 1 点、金属製品 10 点、錢貨 2 点、その他 1 点である。

## (1) 基本層出土遺物

I 層では 114 点出土している。近代の遺物に混じり近世のものがみられ、19 世紀代の大堀相馬産陶器の土瓶や土師質土器の灯明皿（第 23 図-5）、鬼瓦（図版 5-22）などが出土した。II 層では、17～19 世紀中葉の陶磁器が 8 点出土している。17 世紀代と思われる焼塙壺（第 23 図-1）、19 世紀前葉から中葉の美濃産陶器の香炉の破片などが出土した。III 層では 18 点出土している。平安時代の土師器で環や壺をはじめ、19 世紀代の大堀相馬産陶器の土瓶や土瓶蓋（第 23 図-2）が出土している。IV 層からは遺物は出土していない。V 層では 18 点出土している。縄文後期の土器、古墳時代のものと思われる土師器、14 世紀の中国龍泉窯産の青磁皿（図版 5-21）、16 世紀末から 17 世紀前葉の美濃産陶器の皿（第 23 図-4）、17 世紀後半の瀬戸美濃産陶器の香炉（第 23 図-3）などが出土している。

## (2) 搅乱出土遺物

搅乱では 47 点出土している。陶磁器では 17 世紀中頃の美濃産陶器の皿、17 世紀末の唐津産陶器の鉢、18 世紀末の肥前産磁器の碗などが出土している。瓦では、崩瓦、棟瓦、三巴紋の軒丸瓦、平瓦が出土している。錢貨は寛永通宝が 2 点出土しており、どちらも新寛永である。



第23図 遺構外出土遺物

図版番号	写真回数番号	遺構名・層位	種別	器種	部位	釉土	文様等	法算(cm)			産地	時期	備考	登録番号
								口径	底径	高さ				
23-1	5-13	II 層 一括	土師質土器	灯明皿	体部	粗		—	—	(4.20)	在地	17 世紀?	口縁部に段がつく	137
23-2	5-14	Ⅲ層	陶器	土瓶蓋	体部～底部	やや粗	赤絵 山水文	—	0.10	(0.98)	大堀相馬	19 世紀前葉 白濁釉・弦輪・足輪		139
23-3	5-15	V 層	陶器	貞吉呑呑	底部	やや粗	鉢輪	—	(10.20)	(3.10)	瀬戸(?)・美濃(?)	17 世紀後半?	脚 1	145
23-4	5-16	V 層	陶器	皿	口縁～底部	やや粗	長石輪	(11.0)	(5.80)	(1.95)	美濃	16 末～ 17 世紀前葉	志野輪・目神	143
23-5	5-17	I 層 土師質土器	灯明皿	口縁～底部	やや粗			(10.40)	(6.30)	1.42	在地	近世	スヌ付着・外面ミガキ	147
23-6	5-18	複瓦 一括	陶器	皿	口縁～底部	やや粗	長石輪	(11.70)	(7.10)	(2.30)	美濃	17 世紀初期		149
23-7	5-19	複瓦 一括	陶器	輪花皿	口縁部	やや粗	長石輪	—	—	(1.50)	美濃	17 世紀前葉	軒丸瓦	156
23-8	5-20	複瓦 一括	陶器	香炉	体部～底部	やや粗	鉢輪	—	(12.70)	(5.12)	瀬戸(?)	17～18 世紀	西棟	153
—	5-21	V 層	透窓	輪花皿?	口縁	やや粗	輪切文(内面)	—	—	(1.4)	中京(榮宝堂)	14 世紀	音入あり・端反・青磁	121
図版番号		写真回数番号		遺構名・層位		種別		法算(cm)			備考		登録番号	
—	5-22	表揮	鬼瓦	(13.6)	(13.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	H2

第21表 遺構外出土遺物観察表

## 第5章 総括

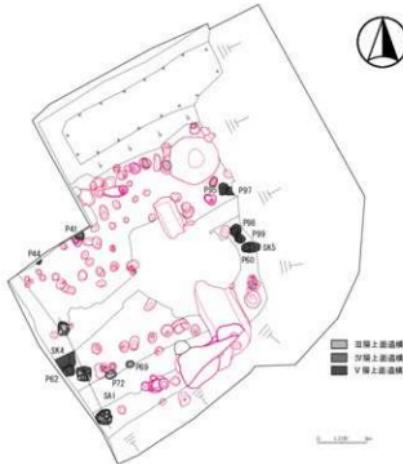
### 第1節 検出遺構と出土遺物について

#### 1 検出遺構について

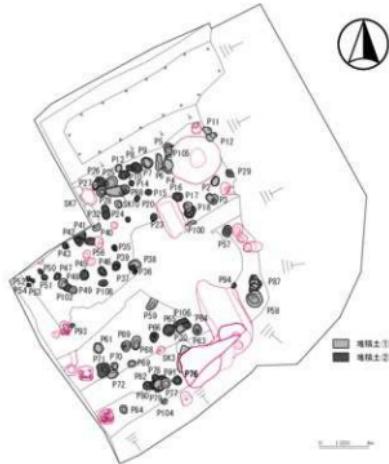
調査の結果、Ⅲ層上面でピット3基、IV層上面でピット4基、V層上面で柱列跡1列、井戸跡1基、溝跡1条、土坑8基、性格不明遺構2基、ピット92基を検出した。検出遺構の大部分は、近現代の盛土・整地層である基本層Ⅰ・Ⅱ層の下面から検出されたもので、本来の掘り込み面は消失している可能性が高い。このⅠ・Ⅱ層成立時の削平により、Ⅲ・Ⅳ層の大部分が消失しているため、各層毎の遺構検出数には大きな隔たりがある。検出した遺構のうち、壁面・遺構断面観察から本来の遺構上面が残されていると判断されたものは、Ⅲ層上面検出遺構ではP69・72、Ⅳ層上面検出遺構ではP41、V層上面検出遺構ではSA1柱列跡、SK4・5土坑、P44・60・62・95・97・98・99に限定される（第24図、第22表）。

これ以外の大部分の遺構に関しては本来の掘り込み面が不明瞭であるが、それぞれの遺構堆積土の特徴から大きく以下のように二分される。

- ①暗褐色・黄褐色粘土質シルトおよび炭化物を含んだ砂質シルト土を、径1～3cm前後のブロック状にやや乱れて含む堆積土。
- ②黄褐色粘土質シルト土を含んだ暗褐色ないしは黒褐色シルト土を、径1～3cm前後のブロック状にやや乱れて含む堆積土。



第24図 Ⅲ～V層上面検出遺構配置図



第25図 堆積土別遺構配置図

遺構番号	
Ⅲ層上面検出構	P69・72
Ⅳ層上面検出構	P41
Ⅴ層上面検出構	SA1柱列跡、SK4・5土坑、P44・60・62・95・97・98・99

第22表 Ⅲ～V層上面検出遺構一覧表

遺構番号	
堆積土①	SK3・7・10土坑、P3～7・11～13・17・24～25・27・28・30～38・40～48・53・58・59・61～63・68～70・72・77・79・84～88・93～100・103・105
堆積土②	P2・8～10・14～16・18・20～23・26～29・32～34～36・39～41～43・45～47・50～54・56～57・64～66・71～76・78～80～82・87・90・91・94・102・108

第23表 堆積土による遺構分類表

①・②の堆積土はそれぞれ、基本層Ⅲ・Ⅳ層に類似する。堆積土を埋め戻し土と捉えた場合、堆積土①の遺構はⅢ層形成後、また堆積土②の遺構はⅣ層形成後に位置づけられる。一方、開口した遺構に整地層が入り込んだと考えた場合、堆積土①の遺構はⅢ層形成以前、また堆積土②の遺構はⅣ層形成以前となる。以上から、それぞれの遺構の掘り込み面は、堆積土①がⅢ層ないしⅣ層、堆積土②がⅣ層ないしⅤ層と幅を持たせて捉えておきたい（第25図、第23表）。

## 2 出土遺物について

本遺跡の遺物は総点数282点である。近代以降に相当する基本層Ⅰ・Ⅱ層および擾乱からの出土が169点と大半を占め、調査対象とした基本層Ⅲ～Ⅴ層からの出土は36点、遺構からの出土は77点である。また破片資料が多く、生産地がわかった遺物は56点にとどまり、詳細が不明なものも多い。以下に遺構ごと、出土層位ごとの出土遺物一覧表を示す。SX2性格不明遺構において、他遺構に比べてやや多くの遺物が出土している。

遺構出土遺物一覧表														
遺構名	土器	土師器	瓦	陶器	瓦質土器	土質質土器	織部	石製品	木製品	金属製品	瓦質	その他	合計	
SD1	1層					2	3				1		8	
	2層					1							1	
	3層			1		1	1						3	
	4層		1	1						1			3	
	5層										1		1	
SE1	3層		1	1	1		1						4	
	4層					1							1	
	5層		1		3	1							5	
	SK1												1	
	SK2	2層		1									6	
SK6	1層		2	2			2						1	
	2層						1						1	
	3層			2	5	9	8			3			27	
	SX2	1層				1	2						3	
	P7	1層					1						1	
P8	一括						1						1	
	P9	1層		1									2	
	P26	1層					1	1					2	
	P29	1層		1									1	
	P48	1層					1						1	
P59	一括						2						2	
	P71	一括	1										1	
	P75	1層							1				1	
	P88	一括					1						1	
	P107	1層		1									1	
P109	1層		1										1	
	合計		10	14	2	21	23	1		4	2		77	
基本層及び擾乱層出土遺物一覧表														
層名	土器	土師器	瓦	陶器	瓦質土器	土質質土器	織部	石製品	木製品	金属製品	瓦質	その他	合計	
基本層	1層		47	22	3	10	27			3	1	1	114	
	2層			4		2	2						18	
	3層		1	8	3	1	2						18	
	4層		3	4	5	1	1						18	
	擾乱			8	16	1	8	9	1		3	1	47	
合計		3	2	67	50	6	23	40	1		10	2	1	205

第24表 遺物一覧表

第25表は、産地からみた遺物の一覧表である。産地を特定できた遺物は陶器が28点、磁器が28点、合計56点であった。陶器については、相馬焼の出土点数が少ないことが特徴としてあげられる。ほか、SX2性格不明遺構から出土した龍泉窯青磁や高麗茶碗は伝世品の可能性もあるが、遺構堆積土は窟んだ部分に土を入れた盛土的な性格が考えられることから、混入の可能性もある。

出土層位 / 産地	陶器											織部 集計	織部				織部 集計			
	在地	地方	織口	天津	天津 天道 ?	大輪 相馬	唐津	津浦 ?	益田	中国	御影		織口 天津 天道 ?	大輪 相馬	唐津	益田 系	中国 窓			
遺構出土遺物	1	1	1	2		1	3	1		1	2	1	14	4	1	8	1	14	28	
Ⅲ層	1		1									3	2	4			6	9		
Ⅳ層					2		1					3		1			1	4		
Ⅴ層			1	3	1							5					1	6		
擾乱			1			2						3	1	4	1		6	9		
合計	2	1	4	6	1	3	5	1	1	1	2	1	28	7	1	17	1	2	28	56

第25表 出土遺物の産地

次に遺構出土遺物・基本層出土遺物を生産時期ごとに示したのが第26表である。生産年代を推定できた遺物は35点にとどまり、掘り込み面が明確な遺構から、年代が判別できる遺物は出土していない。掘り込み面の不明な遺構からは、13～19世紀代の遺物が24点出土している。内訳は、16世紀末から17世紀前葉の遺物として、美野産、唐津産陶器の2点がみられる。17世紀の遺物では、肥前産磁器5点、唐津産陶器4点、朝鮮産陶器1点、17～18世紀の遺物では肥前産磁器碗1点が出土している。また、18世紀の遺物では在地産陶器1点、肥前産磁器2点、朝鮮産陶器1点が出土している。19世紀の遺物は、大堀相馬産陶器1点、産地不明の地方窯陶器1点、瀬戸美濃産磁器2点、肥前産磁器1点が見られる。以上、遺構出土遺物では各遺構の年代を推定するに足る資料を得ることはできなかった。

層別では、Ⅲ層から18点、Ⅴ層から18点の遺物が出土している。Ⅳ層から遺物は出土していない。年代を推定できる遺物の数は極めて少ないが、Ⅲ層から出土した遺物2点は、19世紀前葉から中葉の大堀相馬産陶器の土瓶と土瓶蓋である。Ⅴ層から出土した遺物は、14世紀の中国龍泉窯産の青磁皿、16世紀末から17世紀前葉の美濃産陶器、17世紀の瀬戸美濃産の陶器香炉である。遺構同様、基本層Ⅲ層・Ⅴ層出土の遺物は数が少ないため、整地の年代を推定するにはいたらなかった。

出土層位/時期	13～14c	14c	16～17c	17c	17～18c	18c	19c	合計
遺構出土遺物	1	1	2	10	1	4	5	24
Ⅲ層							2	2
Ⅳ層								0
Ⅴ層		1	1	1				3
根瓦			1	3	1		1	6
総数	1	2	4	14	2	4	8	35

第26表 出土遺物の時期

## 第2節　まとめ

- ・調査の結果、柱列跡1列、溝跡1条、井戸跡1基、土坑8基、性格不明遺構2基、ピット99基が確認された。
- ・SD1溝跡とSK6土坑は、遺構の掘り込み面は明らかでないが、断面形状や底面の標高に加え、堆積土の類似や軸方向の一致などから同一遺構である可能性が高い。
- ・SX1性格不明遺構は被熱硬化面が確認された遺構である。被熱硬化面は上下2面が部分的に残存していることが確認され、2時期にわたり使用されたことが推測される。上下の被熱硬化面は、ともに東側に礫が半ば埋まった状態で確認されている。また礫の上面や側面が被熱していることから、構造物の一部であった可能性があるが、明瞭に確認したのは遺構東壁の一部のみであり、掘り込み面も不明のため、周辺遺構との関連は不明である。
- ・遺構は、基本層Ⅲ・Ⅳ層が削られて分布が限られていたため、大部分をV層上面で検出した。このうち掘り込み面の確実な遺構は、Ⅲ層上面はピット2基、IV層上面はピット1基、V層上面は柱列跡1列、土坑2基、ピット7基である。
- ・遺構の堆積土は、Ⅲ層に類似する堆積土①とIV層に類似する堆積土②の2種に大別された。堆積土①とした遺構は土坑3基、ピット36基である。堆積土②とした遺構はピット45基である。
- ・①・②の堆積土を、埋め戻しと捉えた場合、堆積土①の遺構はⅢ層形成後、また堆積土②の遺構はIV層形成後に位置づけられる。一方、開口した遺構に整地層が入り込んだと考えた場合、堆積土①の遺構はⅢ層形成以前、堆積土②の遺構はIV層形成以前となる。以上から、それぞれの遺構の掘り込み面は、堆積土①がⅢ層ないしIV層、堆積土②がIV層ないしV層と考えられる。
- ・出土遺物は、繩文土器3点、非口クロ土師器1点、ロクロ土師器1点、瓦77点、陶器64点、瓦質土器8点、土師質土器44点、磁器63点、石製品2点、金属製品14点、錢貨4点、その他1点の総数282点である。
- ・遺構から出土した陶器の製作年代は、13～19世紀である。少数であるが13～14世紀代の中国産磁器や16～17世紀代の中国産陶器、17世紀代の朝鮮産と思われる陶器が出土している。基本層からの出土遺物は、Ⅲ層から18点出土しており、19世紀前葉から中葉の大堀相馬産陶器の土瓶がみられる。IV層からの出土遺物はない。V層から18点出土している。14～17世紀までの遺物が出土しており、17世紀後半の瀬戸美濃産陶器の筒型香炉が出土している。
- ・各整地層とともに年代が判別した遺物は数が少ないので、整地の年代を推定するにはいたらなかった。

### 参考文献

- 阿刀田令造 1936 『仙台城下絵図の研究』 東洋書院
- 仙台市環境計画課編・松本秀明監修 2001 『せんだい空中写真集 杜の都いま むかし』 仙台市環境計画課
- 仙台市教育委員会 2006 『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査(3) 概要報告書』 仙台市文化財調査報告書第302集
- 仙台市教育委員会 2007 『川内A遺跡 仙台市高速鉄道東西線関係道路発掘調査報告書I・』 仙台市文化財調査報告書第312集
- 仙台市教育委員会 2009 『仙台城 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書II・』 仙台市文化財調査報告書第342集
- 高倉淳ほか編 2005 『絵図・地図で見る仙台第一輯』 今野印刷株式会社
- 東北大学理蔵文化財調査研究センター 2006 『東北大学理蔵文化財調査年報19(第1分冊)』
- 中川久夫他 1960 「仙台付近の第四系および地形(1)」「第四紀研究」1

# 写 真 図 版





1-1 V形上面調査区全景(北から)



1-2 南壁断面(南から)



1-3 西壁断面南側(東から)



1-4 北壁断面(南から)



1-5 西壁断面北側(東から)

図版1 調査区全景・壁断面



2-1 SA1柱列跡(西から)



2-2 SA1柱列跡 P85(南から)



2-3 SE1井戸跡断面(東から)



2-4 SE1井戸跡検出状況(東から)



2-5 SE1井戸跡断面割り状況(西から)



2-6 SD1溝跡断面(北から)



2-7 SD1溝跡検出状況(北から)



2-8 SD1溝跡・SK6土坑完掘状況(北から)

図版2 柱列跡・井戸跡・溝跡・土坑



3-1 SK1土坑完掘状況(南から)



3-2 SK2土坑完掘状況(南から)



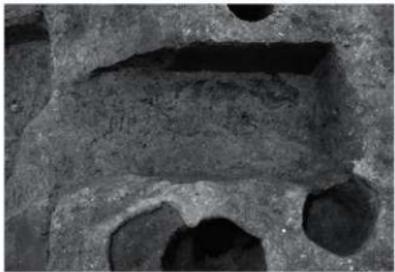
3-3 SK3土坑完掘状況(南から)



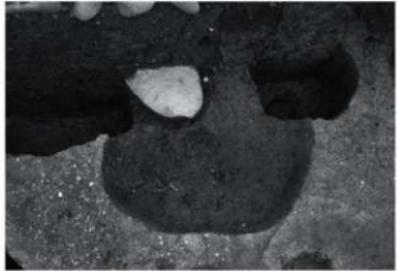
3-4 SK4土坑完掘状況(東から)



3-5 SK5土坑完掘状況(南から)



3-6 SK6土坑完掘状況(東から)



3-7 SK7土坑完掘状況(東から)



3-8 SK10土坑完掘状況(北から)

図版3 土坑



4-1 棲出状況(南から)



4-2 使用面①の棲出状況(南から)



4-3 使用面①の棲出状況(南から)



4-4 使用面②の棲出状況(南から)



4-5 使用面②断面(南から)



4-6 凝灰岩壁の棲出状況(北から)

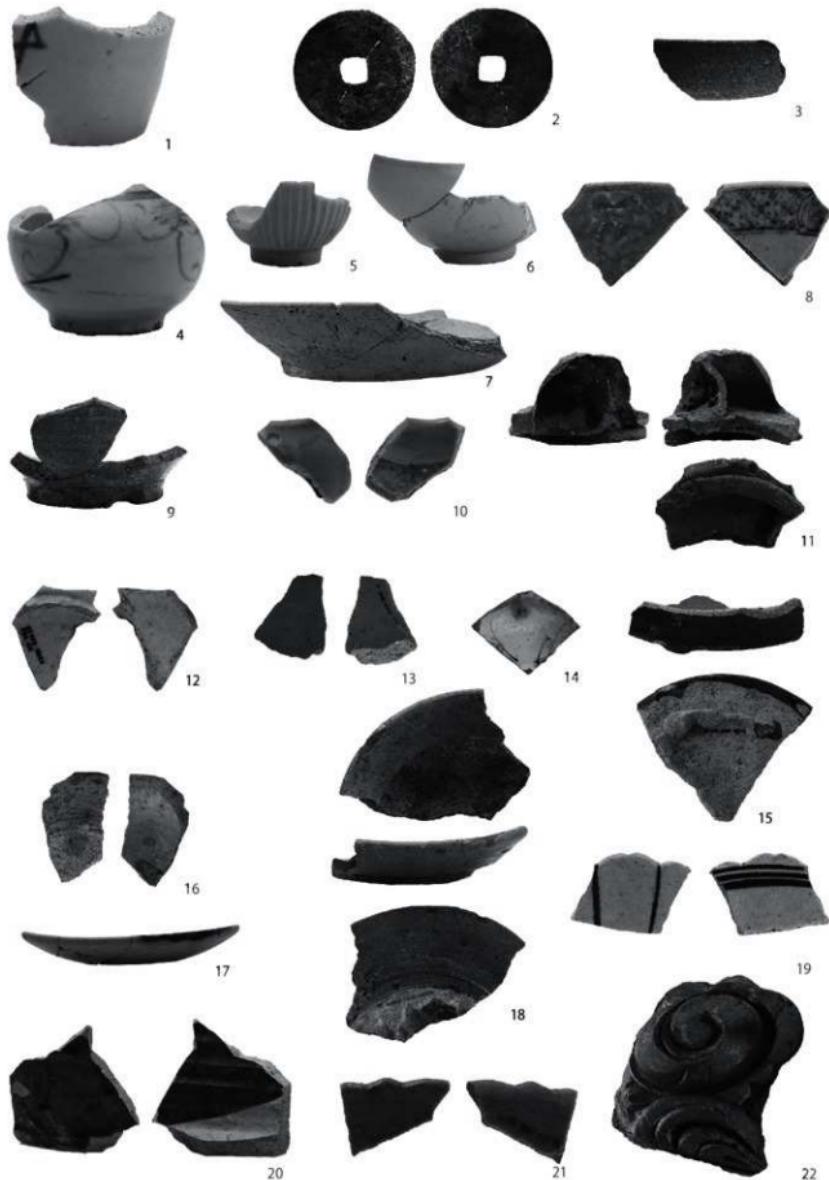


4-7 凝灰岩壁の棲出状況(西から)



4-8 完態状況(南から)

図版4 SX 1 性格不明遺構



図版5 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと ほっぽうぶけやしき だいにじはくつちょうさほうこくしょ					
書名	仙台城跡－北方武家屋敷第2次発掘調査報告書－					
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書					
シリーズ番	第356集					
編著者名	渡部 紀・加藤隆則・志賀雄一・馬場由行・福原千恵					
編集機関	仙台市教育委員会					
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町1番1号 TEL022(214)8894					
発行年月日	2010年3月8日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
仙台城跡	宮城県仙台市 青葉区川内亀岡 68地内	4100 北緯	1033 東経			
		38° 15' 39"	140° 50' 56"	2009.6.10～ 2009.7.28	78m <sup>2</sup>	亀岡雨水幹線 移設工事に伴 う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
仙台城跡	武家屋敷	江戸時代	柱列 溝跡・井戸跡 土坑	繩文土器 非クロコロ土師器 陶器・磁器 土師質土器 瓦 金属製品 錢貨 瓦質土器 石製品		

仙台市文化財調査報告書 第356集  
仙台城跡 一北方武家屋敷第2次発掘調査報告書一

2010年3月

発行 仙台市教育委員会  
宮城県仙台市青葉区二日町1番1号  
文化財課022(214)8894

印刷 八幡印刷株式会社  
本社 福島県いわき市平字田町82-13  
TEL0246(23)1471  
工場 福島県いわき市内郷町桜本135-2